

# 渡来作物の方言と歴史 —じゃがいも方言にみる弱い固有名詞の強い力—

大西拓一郎  
国立国語研究所 言語変化研究領域

## 1. 渡来作物

- じゃがいも、さつまいも、かぼちゃ、とうもろこし、とうがらし等の作物（佐藤 1979）。
- 16 世紀を中心とした大航海時代に、ヨーロッパ人により、アメリカ大陸（中南米）からヨーロッパに移され、さらにヨーロッパからアジアに（日本には南蛮貿易を通して）運ばれた。



## 2. じゃがいも（馬鈴薯）

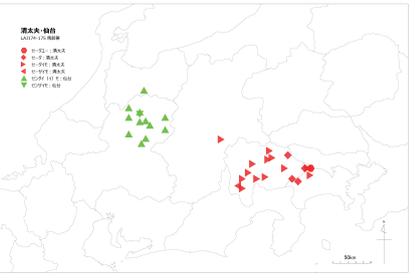
- 原産地の南米からヨーロッパ（オランダもしくはポルトガル）経由で日本に伝わる（17 世紀中頃）。
- 冷涼な気候に強いことから、饑饉対策の救荒作物として広まる。
- 本格的な栽培は、明治時代以降、北海道開拓入植者の主要食糧として定着。
- 第一次世界大戦以降、でん粉の輸出用に作付面積が急増。
- 以上、財団法人いも類振興会編（2012）、山本（2008）参照。
- 『物類称呼』1775（安永 4）年には扱われない（「さつまいも」「かぼちゃ」「とうもろこし」「とうがらし」は扱われる）。

## 3. 甲州の中井清太夫

- 甲府（甲州）の代官、中井清太夫が幕府の許可のもと、飢饉対策としてじゃがいもを九州から取り寄せ、広めたとされる（伝承）。
- 中井清太夫 1777（安永 6）年～1787（天明 7）年、甲府の代官を務める。じゃがいもによる飢饉からの救命により、龍泉寺（山梨県上野原町）に「芋大明神」として祀られる（小林貞夫 1987）。
- 領民による功德碑建立願いに対し、代官の義務遂行として聞き入れなかった。しかし、その後、山梨県三珠町に功德碑、神明神社（甲府市）に石祠が建立された（高槻 2012）。笛吹川の支流、押出川の治水でも知られる（手塚 1978）。

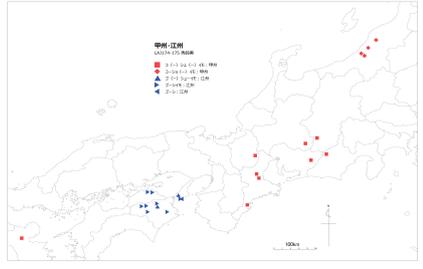
## 4. 清太夫から仙台へ

- 人名がもとになって、地名への類音牽引・民間語源が働き、「じゃがいも」方言の言語変化が起こった。
- 甲州で人々の救いとなる「じゃがいも」を広め、祀られた清太夫はその「じゃがいも」に名を残した（セーダ・セーダイモ・セーザイモ）。
- ところが、清太夫の謙虚な姿勢のためか、甲州以外にその名はあまり知られることはなかった。清太夫の名とともに「じゃがいも」は、甲州から 100km 以上離れた隣県の岐阜県飛騨地方に広まったが、馴染みのない名前、似た名前を持つ東北地方最大の街「仙台」に置き換えられた。そこには類音牽引と「寒さ」のイメージによる民間語源が働いた。
- なお、飛騨地方については当地の代官、幸田善太夫に由来する可能性もある（伊藤 2008）。この場合もやはり「仙台」に置き換えられる変化があったと考えられる。



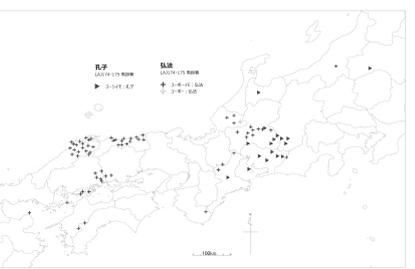
## 5. 甲州から江州へ

- 「じゃがいも」方言の「江州」は西日本に分布する。
- 救荒作物の「じゃがいも」は、甲州から広まった。そこで、おもに中部地方で、コーシュー・コーショイモと呼ばれた。
- ところが、「甲州」は西日本から遠く、西日本人々にはあまり馴染みのない地名であった。そこで、「甲州」に音が似ていて、西日本に近く、「近江商人」で有名な地名「江州」に置き換えられる変化が起きた（ゴシューイモ・ゴシューイモ・ゴシュー）。



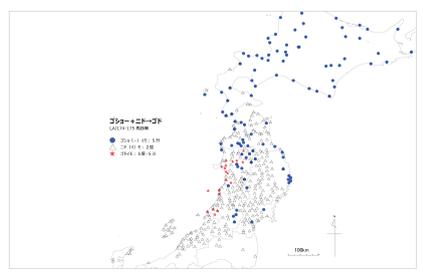
## 6. 甲州から孔子・弘法へ

- コーシイモは「孔子」に該当するが、もとは「甲州」である（沢木 1979）。救荒作物「じゃがいも」の草分け地から離れたと、良く理解されない地名「甲州」は、饑饉から人々を救う救荒作物への敬意により、似た音の「孔子」へと置き換えられた。
- そのような作物に対する敬意は、語頭の「コ」のみ残して（語頭の「コ」が牽引して）、コーボー・コーボーイモ（弘法大師：真言宗の開祖、空海）に変化させた。「弘法」に置き換えられた「甲州」は、中部地方の越前・美濃や中国地方の備後・山陰ではあまり馴染みのない名前であったことも効いていると考えられる。



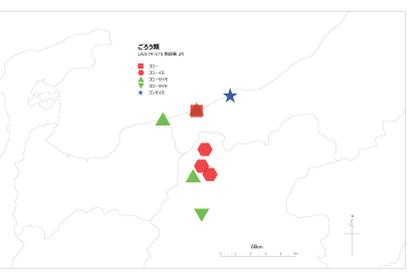
## 7. 数量化 三類

- 「じゃがいも」は、冷涼な気候に強いとともに、豊富な収穫量と二期作可能な性質を持つ。そのことで「江州」（<「甲州」）は、《量》や《回数》という数量化に変化する。
- 「甲州」から変化した「江州」は、東北北部から北海道において、ゴシュー（五升）へと変化した。救荒作物「じゃがいも」の生産《量》の多さを表す名前に変化した。
- 二期作が可能な救荒作物「じゃがいも」は、収穫の《回数》からニドイモ（二度芋）と、東北地方で広く呼ばれた。
- 《量》を表すゴシューと《回数》を表すニドが混交（blending）することで、新たにゴドが生み出された（ゴシュー+ニド=ゴド：東北地方日本海側）。ゴドの背景には「五斗」「五度」という意識があり、収穫の《量》と《回数》が強化された。



## 8. 擬態語を経て固有名詞に戻る

- ゴロを語頭に持つ一連の「じゃがいも」方言形が確認される。ゴは、ゴド（五斗・五度）同様に、甲州をもとにする江州から派生したものかもしれない。そこに「じゃがいも」の形状から、擬態語のゴロによる名称が生み出された。
- しかし、ゴロは擬態語にとどまらなかった。「いも」は「右衛門」に似ていた（e.g. ごろいも・ごろえもん）。ここからゴローザやゴロータなどの固有名詞を含む語形が生み出された。
- 「清太夫」「甲州」という固有名詞から出発した「じゃがいも」方言は、ふたたび、固有名詞に帰っていった。



## 9. まとめ

### 9.1 類音牽引・民間語源と連想変化 (association)

- 「甲州」の「中井清太夫」が救荒作物の「じゃがいも」を広めるもととなった。
- 「中井清太夫」「甲州」は、ともに現地を離れると、あまり広く知られることのない「弱い固有名詞」であった。
- 弱い固有名詞であったために、現地から離れたところ（伝播先）では、それぞれの場所で、音的類似性と意味・背景のつながりを持つ、なじみのある名称に変化させることになった。すなわち、言語変化を生み出す強い力を発揮した。
- 「清太夫」→「仙台」（寒さ）
- 「甲州」→「孔子」「弘法」（救いへの敬意）
- 「江州」（地名）→「五升」（量）→「二度」（混交）→「五度」（回数）
- 「五郎」：人名に帰帰
- このような言語変化は、従来、類音牽引や民間語源と呼ばれてきた。実際には、音の類似性と意味の異分析は、切り離すことができず、相乗効果により引き起こされることが多い。このような両方の効果による言語変化を「連想変化」(association)と呼びたい。
- 今回あげた中では、類音牽引の「五郎」以外は連想変化として扱える。

### 9.2 人名と地名

- 「清太夫」「善太夫」のような当初の人名に基づく名称は、現地で用いられる。（類例は、要検討）
- 「甲州」のような当初の地名に基づく名称は、現地から離れた場所で用いられる。類例：「甘藷」リュウキウイモ（西日本） サツマイモ（中国地方以東） 「瀬戸物」カラツモノ（九州東部・中国四国・北陸）

文献  
 伊藤 幸治 (2008) 『ジャガイモの歴史』中公新書  
 大西拓一郎 (2018) 『交易とことばの伝播—とうもろこしの不思議を探る—』『日本語学』37-2  
 小林貞夫 (1987) 『神に祀られた芋代官』『郡内研究』1  
 財団法人いも類振興会編 (2012) 『ジャガイモ事典』全国農村教育協会  
 佐藤 亮一 (1979) 『物の伝来と名称の伝播—渡来作物をめぐって—』『言語生活』312  
 沢木 幹夫 (1979) 『物とことば』徳川宗賢編『日本の方言地図』中公新書  
 高槻 愛雄 (2012) 『中井清太夫という男』『神戸大学経済経営研究所ニュースレター』119  
 手塚 善男編 (1978) 『郷土史典 山梨県』昌平社  
 山本 紀夫 (2008) 『ジャガイモのきた道』岩波新書  
 Granovetter, Mark S. 1973 The strength of weak ties. *American Journal of Sociology* 78  
 Onishi, Takuhiro. 2018 Japanese dialectal words for imported produce that include proper nouns: morokoshi ("China"), nanban ("southern countries"), and other place or person names. Komatsu Round-Table Conference on Geo-linguistics  
 本報は ISPS 料研究 16403415・16K13232 による。